

# 魅力と活力のある学校づくり

## ー「たくましく生きる力を育てる」ための地域と学校との連携ー

広陵町立広陵中学校 教諭 川 田 竜 也

Kawata Tatsuya

### 要 旨

日本の社会は少子化・高齢化が進み、現在の子どもたちが社会を支えていく責務は今以上に重くなるであろうと専門家たちが予想している。そのためにも子どもたちがたくましく生きる力を身につけ、人に優しく思いやりや協調に満ちた社会の形成者になるように、私たちが日々の教育活動を点検し、教育効果が上がるように取り組む必要がある。本研究では「たくましく生きる力を育てる」ために学校が地域や家庭とどのように連携をすれば、教育活動に生かしていくことができるのかを考察していく。

キーワード： たくましく生きる力、地域を担う子、連携

### 1 はじめに

改正された教育基本法では、第2章 第10～13条に家庭教育、幼児期の教育、社会教育、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力、に関する条項が設けられ、特に第13条では「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに相互の連携及び協力に努めるものとする。」と示されている。教育は学校だけで行なえるものではなく、家庭はすべての教育の出発点であり、地域社会の果たす役割も重要である。

学校・家庭・地域の三者が、それぞれの役割と責任を自覚し、お互いに協力し合うことが求められている。子どもたちが「たくましく生きる力」をつけるための支援として、学校・家庭・地域として何ができるかということ考察してみた。

### 2 研究目的

「たくましく生きる力」を育成するための地域と学校との連携に関する現状と課題を明確にし、それぞれのニーズを踏まえながら、これからの連携の在り方について考察する。

### 3 研究方法

- (1) アンケートを実施し、地域と学校との連携に対する意見を分析する。
- (2) 地域や保護者の求めるものと子どもたちの求めるものとの関係について考察する。
- (3) 地域と学校が連携しながら子どもたちとともに活動できることを考える。

### 4 研究内容

- (1) 地域と学校との連携についての考察

学校に対する要望、地域とともにできること、期待する子ども像に関するアンケートを平成21年1月に行い、意見を求めた。地域の意見として、部活動を支えていただいている方々やその家族、またその近隣の方々のご意見をまとめた。保護者の意見として、クラスや部活動生徒の保護者等のご意見をまとめた。生徒たちの意見としてクラス、部活動生徒、授業対象クラス生徒の意見をまとめた。

	地域の意見	保護者の意見	生徒たちの意見
学校に対する要望	○落ち着いた雰囲気 で授業が受けられる環境づくり ○挨拶・礼儀などのしつけ教育	○落ち着いた雰囲気 で授業が受けられる環境づくり ○いじめのない学校 ○確かな学力	○楽しい学校 ○いじめのない学校 ○分かりやすい授業 ○部活動の活動時間の延長
地域とともにできること	○祭りへの参加 ○地域の清掃 ○防犯・交通指導	○地域の清掃	○地域の清掃 ○ボランティア
期待する生徒像	○挨拶のできる子 ○心の優しい子 ○地域で育つ子（地域を担う子）	○心の優しい子 ○勉強、スポーツのできる子	

アンケートから分析し考察する。

今回のアンケートで分かるように、全国のどこの学校でアンケートを行っても共通項として出るような回答である。これは一見ありふれているように見えるが、実はどれ一つとっても目標をクリアすることは大変困難な内容である。

- ① 学校に対する要望についての意見「落ち着いた雰囲気  
で授業が受けられる環境づくり」「確かな学力」「  
分かりやすい授業」について
  - ・本校では従来基本的な生活習慣の徹底を重点目標においてきた。生徒が自発的に生き生きと取り組む授業の構築が保護者や地域の思いに応えた学力保障であると考えている。
- ② 学校に対する要望についての意見「いじめのない学校」について
  - ・すべての教育活動において人権意識を高め、他尊感情や自尊感情を持たせ、生徒と対話し、聞く時間をしっかりと確保することが大切である。本校でも、「いじめアンケート」を実施し、実態の把握とともに6月と10月に『ふれあい旬間』という期間を設け、放課後、個人懇談を実施している。しかし、生徒の意見に「いじめのない学校」という意見が出たことから、保護者とも連携し、家庭訪問を行い、時間をかけて解決に取り組む必要があると考える。
- ③ 地域とともにできること「祭りへの参加」について
  - ・村の文化や伝承されるものへの興味と関心をもち、文化や技術を自らの体験することが大切であると考えている。
 地域とともにできること「地域の清掃」について
  - ・様々な教育活動の中で、ボランティア活動の基となるもののひとつに清掃があると考え

る。

- ・郷土愛を育むために、小学校・中学校・地域との連携し地域での共同活動を構築する必要があると考える。

④ 期待する子ども像「心の優しい子」について

- ・地域や高齢化社会を支える若者の担う役割は今まで以上に必要となっている。協調性・公共性・公正・思いやりなどの伸張を図る教育活動を展開する。

期待する子ども像「地域を担う子」について

- ・小さな頃から様々な行事やつながりで地域を愛する心を養い、分析に述べた内容を具現化していけば必ず地域を支える人材が生まれると確信する。

**(2) 地域や保護者の求めるものと子どもたちの求めるものとの関係について**

P T Aからとったアンケートより（平成21， 1， 10）

A：そう思う

B：どちらかというと思う

C：どちらかというと思わない

D：そう思わない

	項 目	A	B	C	D
1	お子さんは楽しく中学校生活を送っていると思われ れますか。	6 6 %	2 8 %	4 %	2 %
2	学校の雰囲気良く、生徒が生き生きしていると思 われますか。	4 2	5 0	4	4
3	学校が学習環境の整備に力を入れていると思われ ますか。	2 6	5 0	2 0	4
4	授業がわかりやすく、一人ひとりを大切にしてい ると思われますか。	2 4	5 6	1 4	6
5	文化発表会・体育大会等、学校行事に積極的に参 加している生徒が多いと思われますか。	6 2	3 4	4	0
6	「部活動」や「生徒会活動」に熱心に取り組む生徒 が多いように思われますか。	5 2	4 0	8	0
7	学校がいじめや暴力・事故のない学校づくりに取 り組んでいると思われますか。	3 0	5 6	1 0	4
8	先生は子どもの間違った言動を正し、身に付ける ことをきちんと指導してくれていると思われ ますか。	3 4	5 6	1 0	0
9	学校はP T A活動や地域の諸活動に協力的である と思われますか。	3 8	5 4	6	2
10	保護者が授業や学校行事を参観する機会をよく設 けていると思われますか。	4 6	4 8	6	0
11	学校は各種連絡文書で教育活動内容を知らせてい ると思われますか。	4 6	3 2	2 0	2
12	学校が地域での職場体験活動等を積極的に行っ ていると思われますか。	5 2	4 2	6	0

13	先生は子どもたちの教育に熱心に取り組んでいる と思われませんか。	38	54	8	0
14	生徒や保護者にとって、魅力があり信頼できる中 学校であると思われませんか。	28	60	10	2

アンケートを見る限りでは、本校に対しての保護者の見方は比較的肯定的である。しかし C：どちらかというと思わない D：そう思わない と回答された原因・理由について検証する必要がある。

1の項目から見えてくるものは、94%の意見は肯定的であるが、家庭で本当に生徒の内面に迫って対話がなされているかというところを考えなければならない。親から見えている学校と子どもが感じているものとのギャップはないだろうか。また6%の生き生き過ごせていない生徒たちの原因・理由について考える必要がある。

2の項目では挨拶ができるか、チャイムを守って行動できるかなど基本的な生活習慣ができているかについて考えてみる。生徒が生き生きしている教育活動、つまり日々の学習活動、部活動、学校行事などに積極的に取り組んでいるかどうかということも考えられる。

3の項目については、限られた学校(教育)予算の中でいかに工夫しながら環境づくりをしていくかが課題である。教育機器の充実も大切であるが、一所懸命掃除をしたり、ものを大切にしたりする心を養い、手づくりの教育を粘り強く行っていく必要がある。

4の項目については、授業についていくのに努力を要する生徒に対する支援をどうしていくのかを考えなければならない。本校ではサポートルームとして毎週火曜の放課後、1時間程度であるが上記生徒に対する学習支援をおこなっている。また各教科においても部活動指導や会議・研修のある中、放課後補習を行って支援している。

6の部活動に対しては本校では全員参加の形をとっているため、部活を行わずに帰宅する生徒はほとんどいない。しかし、人間関係のもつれや活動に対しての悩みから転部をする生徒空手やサッカーや野球など外部チームに所属する生徒は若干名であるが存在している。その中には地域で組織している太鼓の練習に参加している生徒もいる。

11の項目については、各教科の学習内容や評価についてのプリント配布し、学年懇談や学年通信を通じて学校の様子や行事を通知するとともに理解を求めているが、生徒が親にプリントを渡していない、親子の普段のコミュニケーション不足もあると思われる。

9、10、12、13の項目では、概ね肯定的な見方をされている。

全体として、生徒や保護者、地域にとって魅力があり、信頼される学校を目指して情報発信するとともに理解を求め、連携していく取組が必要である。

### (3) 地域と学校が連携しながら生徒たちとともに活動できることを考える。

本校は総合学習として1年次にエコ・クリーンキャンペーン、2年次はキャリア教育(「私のしごと館」への校外学習・職場体験学習)、3年次は進路を考える取組を行っている。

特に、エコ・クリーンキャンペーンについては今年度初めての実施である。2学期の総合学習で環境問題についてそれぞれがテーマを設定し、調べ学習を継続して行ってきた。そして11月の中旬、本校の東隣を流れる高田川の清掃作業をすると共にゴミの分類、調査を行った。実施前は気温の低下や長靴・ゴム手袋などの準備も必要ということもあり、生徒たちは

「面倒くさい」「寒い」「やりたくない」など、始めは気が進まない様子であったが、いざ行ってみると体操服が濡れても、長靴の中まで水が入っても熱心に2時間ゴミを拾い続けた。そのときの生徒の感想文の一部を紹介する。

「はじめに用意されたゴミ袋を見て『こんなにいらんやろう。』と思っていたけど、終わる頃にはどの袋もパンパンになり、入りきらないほどでした。こんなにも高田川にゴミがあったことにびっくりしたけど、今日だけでもキレイになったかと思うとうれしく思いました。」

「自転車の車輪が埋まっていて友達と一緒に掘っていたらなんと自転車自体が埋まっていた。びっくりだった。なぜ川に捨てたのだろう。粗大ゴミに出せばいいのに。…引っ張っても掘っても結局、自転車はとれなかったが、他にも電気釜やコンセントなど「なぜ？」と思うものがいっぱいあった。」

「エコクリーンキャンペーンの後、私も友達も、ゴミを川へ捨てなくなりました。川へゴミを捨てるということがすごく愚かなことだと思いました。」

今回は保護者への参加も呼びかけたが、参加者はいなかった。しかし、町の広報に掲載されるなど保護者以外の地域の方にも活動を知ってもらい、今後活動を重ねていくことが、今後地域と連携しながら教育活動を推し進めることにつながるのではないかと考える。

また、2年次の職場体験学習では町内の事業所を中心にご協力をいただき、4年目の事業となっている。この4年間の中での成功や失敗を踏まえ、マンネリ化するのではなく、さらに生徒たちの有意義な体験と地域とのつながりを深めていくことが課題である。



生徒たちに地域との関わりについて聞いてみると、共に何かしているということはほとんどないらしい。しかし、小学校時代は大字ごとに「子ども会」があって月に1回、または2か月に1回の活動の中で、1年～6年の縦のつながりを持ちながら遠足やクリスマス会などのレクリエーションだけでなく、祭りへの参加や神社の清掃など地域との関わりのある活動もしてきたとのことであった。そこで、中学1年生に中学校でも子ども会の活動を継続してみたいかと聞くと、「面倒くさい」「部活動で忙しい」との意見が大多数を占めた。しかし、中には「寂しいわけではないが、そんなつながりや活動があってもいいと思う」という意見

もあった。クリーンキャンペーンと同様に何かやってみれば、生徒たちも感じるどころ考えるところが出てくるのではないだろうか。

## 5 研究成果と考察

学校に対する生徒の意見や地域の意見、保護者の意見を調査し考察すると、学校が中心となって進める連携、保護者が中心になって進める連携、地域が中心になって進める連携などが考えられるが、いずれの取組にしても生徒たちが中心となって生き生きと取り組めるよう協力できる体制づくりをしていく必要がある。

ただ、現在ではいろいろな弊害、例を挙げると、近隣同士のつながりの希薄さや不況からくる財政状況・家庭の経済状況の悪化、休日の社会教育の整備の停滞、個人主義などが考えられる。

今、子どもたちを取りまく環境が多岐に渡って変化している。特に、生徒の保護者たちの中学時代とは遊び方や価値観、時間の使い方に違いがある。生徒たちの余暇の過ごし方について聞いてみると、部活動、塾、テレビ(ビデオ)、ゲーム、携帯電話(メール)、インターネット、友だちと遊ぶなど個人の差はあるが、家族で過ごす時間が少ない現実があり、ともに同じ空間にいても別々のことをしているという。しかし、この現実から、生徒に「たくましく生きる力」を身につけさせるために学校・家庭・地域がつながる必要がある。そのために大人は何をすべきか、生徒には何ができるか。つながることによって、どのような効果があり、どのような課題があるのかという新たな視点や展開を考えることができるのではないだろうか。

地場産業の靴下製造やなすびなどの野菜栽培、地域の伝統芸能の学習、福祉施設との連携(現在、生徒会、有志活動レベルで関わっている)など身近にできることから地域の良さを感じ、ともに活動していくことが、将来、地域を担っていく自覚や郷土愛につながり、地域と学校との連携による教育活動の活性化を継続して増進していくと考える。そして、そういう感情や行動は行事以外の授業の中でも養うことも可能である。「地域マップ(絵地図)」を制作し、地域を調べ、よさを再発見したり、地域の「ゆるキャラ」を考えたり、地域の野菜を活用した料理作りなど、各教科の特色を生かし授業を構築することができるだろう。

## 6 おわりに

すでに始まっている高齢化社会に対応していくためにも、子どもの頃から地域社会と連携し、ふるさとのよさを感じ、誇りをもち、温もりのある社会をつくっていく一員として連帯意識をもたせる活動が必要とされるのではないだろうか。学校として、保護者として、地域として、それぞれが生徒たちのために何をすべきかという視点に立って考え、連携を図ることが重要となってくる。これらは「対等」という関係であって、お互いに「かせ」となるものではない。三重県のコミュニティ・スクール指定校の紀南高校では町で要らなくなった照明機器がグラウンドで生かされ、先生は小学校のサマースクールで講師となり、吹奏楽部は地域のイベントに参加しているという。このように地域と連携した教育活動の広がりが、子どもたちに何をもちたすかを調査・検証し、その教育的効果を生かして開かれた学校づくりをしていきたいと思う。

**参考文献** (1) 三重県立紀南高等学校ホームページ <http://www.mie-c.ed.jp/hkinan/>